

釣れ釣れなるままに

2011年思い出の釣行記 PART. 7

若らって素晴らしい



鹿島釣狂

ニシンに変身したアナゴ

☆釣行日 平成23年10月9日(日)

☆入釣場所 苫小牧西港西埠頭

☆釣果 アナゴ1(50cm)

シャケ釣りから帰ってきて前野氏に連絡する。米穀店を経営する前野氏は秋の収穫期を迎え新米の買い付けで忙しいようだ。3.11に襲った津波の影響で米が値上がりしているという。北海道は例年のない豊作で市場が活気づいているというのに・・・。

クロガシラを当て込んで午後の早い時間に出発する。15:00には苫小牧南埠頭に到着したが、例のごとく外国船が入港していたため埠頭の入口でガードマンが手で×印を作って合図する。

仕方なく、前回の釣りで春には地元の人がクロガシラを大釣りしたという白灯台や菱中造船所付近を巡りながら、結局西埠頭に出た。西埠頭ではこれも中古車を積載する大型貨物船が停泊し、ひっきりなしに車が行き交っていたが、比較的釣り人が少なかったので二人分の空きスペースを確保して竿を出すことにした。竿を設置して缶ビールをプシュッとやるいつもの儀式をして、アルコールが抜けるまで6時間はここを動かないという狼煙を上げた。

しかし、アタリはさっぱり出ない。今日は本格的にクロガシラ用の仕掛けを用意してきたのに・・・。周辺の釣り人もあきらめ顔だ。サビキ仕掛けを遠投している御仁がいた。何を狙っているのかを尋ねると、前回の南埠頭で同じ事を尋ねた御仁だった。「あんたは前にも同じ事を聞いてきたよな。これで三度目だ。しつこいな」と言われてしまった。気まずい空気が流れる。私は二度目だと思うが彼に言われてしまうと3度目なのかもしれない。バツカンをチラリと覗き見するとニシンの大きな鱗がこびり付いていたので、ニシンでも狙っているのだろうと想像することは出来る。ニシンの投げサビキ釣りが最近流行ってきているのを聞いていたが、実際にやっているのをみたことがないので当人に確かめたかったのだが、それ以上は声に出すことは出来なかった。

自陣に戻って竿先に目をこらすが一向にアタリが出ない。前野氏のすぐ隣に入った釣り人が発動機を炊いてニシン釣りを始めた。そしてまもなく25cm~30cm程のビカビカとした旨そうなニシンを釣り上げた。5、6本上げたかなと思っていると、前野氏がサビキがないかと言いつ出した。そんなこともあるだろうといつも準備だけはしている。ロケットカゴに詰め込もうと思っていたコマセもある。仕掛け入れの中からイワシ・ニシンと書かれたハゲ皮の8号サビキとコマセを渡した。前野氏はおぼれを授かりながら結局10本ほどのニシンを釣り上げた。前野氏がアナゴ用に用意したはずの発泡スチロール箱にはビカビカのニシンが収まった。



本日の釣果はたった1匹のアナゴだった

岩見沢釣遊会第6回大会

☆開催日	平成23年10月23日		
☆開催場所	様似港～襟裳港		
☆入釣場所	様似港		
☆釣果	アブラコ	450 mm	4
	タカノハ	350 mm	1
	重量	4820 g	
☆成績	合計点数	1282 点	
	成績	準優勝	

大会の1週間前に次のような「釣遊会便り臨時便」を会員に送付した。

第5回大会結果報告に併せて第5回までの年間成績をお知らせいたしました。自分の成績はいかがだったでしょうか。接戦を勝ち抜いての年間総合入賞や年間魚種別身長賞の獲得をひそかに思い描いている御仁もおられるのではないのでしょうか。また、仕事の都合や体調不良で参加がままならなかった方も仲間の釣果に触れて心に秘するものをお持ちになっていることを願うところです。

さて、本年度の岩見沢釣遊会大会も残すところあと2回となりました。ところが次回の第6回大会は東静内港～浦河港での開催を予定して案内を差し上げておりましたが、あいにく当日は道釣連の大会が同じ範囲で開催されることになったということです。そこで、役員で相談した結果、場所を変更して様似港～襟裳港までの範囲で開催することになりましたのでお知らせいたします。道釣連の大会となると200名余りが釣り場にどっと押し寄せ、最初の釣り場を確保できたとしても移動する場所がない、また、せっかく確保した釣り場でも隣に入った猛者達に場所を占拠されかねないことが想定されます。釣り技術で

は負けないものの紳士を標榜している釣遊会会員には荷が重いと考えたからです。

第6回大会に向けて入念に釣り場の検討をし、それに合わせた秘策を準備されていたことと思われませんが、ご理解の程を宜しく願いいたします。様似港や襟裳港ではバスが横付け出来ますので体調不良で参加を躊躇している方も安心して参加できることになろうかと思えます。また、この区間はカジカが岸寄り始めたという事に併せて、週末ごとに海が荒れて竿が出されていないということもあり大物の釣果が期待されます。是非、たくさんのご参加をお待ちしております。

出発日、嵐氏と年間優勝を争っている吉井氏より電話が入る。微熱があるので大事をとって参加することができない。現在は37.2度だが、今後熱が上がっていきそうな具合だ。エサも含めて準備万端整えており、本来ならこの程度の微熱をおして参加したいところだが断念せざるを得ないというのだ。それではということで、私はエンルムを得意とする吉井氏に代わって様似港周辺を攻めることにした。今回の最干潮が6時6分、54cmとあり、多少波があるが波裏となるエンルムの出岬平盤に乗っていることが出来るのは4時から8時までと考えると十分釣りになるのである。

若いって素晴らしい

様似漁港で身支度を調べてから会所前を1番に下ろしてもらおう。様似は私一人らしい。潮待ち時はアカハラでも狙って舟揚場で竿を出すことにする。余り期待は持てないが嫁を確保しておく必要があるのだ。幸いにも狙いとした舟揚場には誰もおらず、アカハラ仕掛けを近投、カジカ仕掛けを中投、根があるという沖に向かってアブラコ仕掛けを遠投する。すると、すぐにその中投の竿にチョコマカとアタリがあり、アカハラでも付いたかと喜び勇んで引き上げると残念ながらガンジであった。いやな予感がする。以前、白里谷でタカノハを狙って釣りをしていたときに隣に入った清鱗会の朝倉氏が「1発目にガンジがくると今回の釣りは不調になる。エサを変えることが必要だ」と話した言葉が思い起こされる。

しかしその心配をする必要はなかった。同じ所に振り込んだ竿にゴンゴンというアタリが出てアブラコの40cm強が来たのだ。後は岸寄りしているというカジカを狙うことにして、アカハラ仕掛けを回収し、カジカ仕掛けを振り込んだ。しかし、釣れてくるのはアブラコばかりだ。本日の婿となった45cmほどのアブラコも来て、アブラコが5本そろってしまった。そうするとやはり嫁がない不安にかられる。

遠投はエサだけかじられて竿にのらないので、おそらくカンカイでもいるのだろうと仕掛けを丸セイゴの14号バリに変えて、道糸を張らないように待つとようやく小さなアタリが出た。その主は思った通りのカンカイだった。審査規定の20cmに届くかどうかというカンカイがイソメのエサを啜って上がってきたのだ。その後、カンカイは釣れるのだが似たり寄ったりのものばかりで、嫁がそんなものだと不安になる。

中投の竿にフワリと横揺れしながら道糸が更けるようなアタリが出た。引き上げるとエ

サはそのままである。コマセネットを啜えて横走りでもしたのだろうか。もしやと思い同じ所に打ち込むと同時に同じようなアタリが出た。竿を手に糸ふけをとり、グンとしたアタリに合わせるとズシッと釣った。期待した大物ではなかったが規定をわずかに超えるタカノハだ。念のため特徴である鮫肌の背中にメジャーを当ててみると36cmを指している。審査時には縮まって規定ぎりぎりになることが予想されるが嫁として登録されれば申し分ない。

3時、アタリもなくなり、エンルムに乗れる時刻も近づいてきたので、竿を片付け移動の準備をする。今日は心にゆとりがある。いつもは次の釣り場へと焦って汗をかくのだが、ゆっくりとした動作で鼻歌なんぞもでてきてしまう。ふと気がつく、「若いって素晴らしい」のメロディーを口ずさんでいるのだ。何故この歌なのだろう。私の青春時代にスクールメイツが歌ったこの歌を、今、ミッツ・マングローブがカバーして歌っている。それがカーラジオから流れてきて思わず「若いって 素晴らしい」と歌ってしまったのが頭の片隅に残っていたのだろう。一部、歌詞を変えて「アブラコは両手に一杯 カジカも欲しいの」「ああ、カジカが私を呼んでいる」「あの青い海を見るの」と歌ってみた。

今日は温かで、用意した防寒着を脱ぎ捨てて釣りをしていた。それを丁寧にリュックにくくりつけて、新調したキャスターに荷物を積んで様似港外防波堤のつけ根に着いた。釣行前の予定ではこのつけ根で竿を出してみるようになっていたのだが、たくさんの釣り人が防波堤の上から外海や港内に向けて竿を出している。釣遊会では外防波堤上での釣りは禁止されており岸側からしか打つことしか出来ないが、この状況では道糸が交差してしまい難しい状況だ。防波堤を歩いて釣果を聞いて回るとそのうちの1名が大釣りをしており、それを聞きつけた仲間が集まってきたらしいのだが、その時は「カジカやアブラコが両手にいっぱい」は終わってしまっていたらしい。

エンルム岬

4時、平盤上にわずかに残り白く光っていた海面が所々黒くなりはじめたので、キャスターとリュックを防波堤の根元に置き、竿袋だけを担いで浅くなった潮を漕いでいった。釣り人は岬の先端に一人いるだけでどこでも竿を出せる状況だ。張り出した岩盤は全く平らでどこまでも歩いて行くことが出来る。そして先端から少し手前にある横溝と縦溝の交差した所に三脚を設置して竿を立てかけた。それからおもむろにリュックを取りに戻った。その間に防波堤にのっていた釣り人達も、てんでに移動し始め、狙いとしていた場所に入ったようだ。

私は、この溝に入っているだろうカジカに期待を込めて何度もゴロ天秤ネット仕掛けを打ち返すが全くアタリが出ない。ハゴトコしか釣れないとぼやいていた周辺の釣り人だったが、私にはアタリ一つ来ない。竿上げ間近になって25cmほどのカジカが来ただけだった。タカノハが審査規定の35cmに届かなかったことを考え、一応そのカジカを嫁の保険として確保する。

アタリが出ないので周辺の様子を聞いて回る。先端にいる人に声を掛けようと近づいた時に、その釣り人が竿に駆け寄り腰を低く構えた。見守っていると竿尻が持ち上がるアタリに合わせて引き寄せると見事なカジカだった。「暗い内から苦勞して先端に渡ったのにハゴトコしか釣れなかったのだからようやくカジカが来た。あんたは福の神だ」と言われてしまった。そのカジカ1本がほしいのだ。



干上がったエンルム岬に出てみたが釣果は思わしくない。手持ちぶさたな釣り人達

釣れないのに業を煮やしてか、たき火をはじめた隣の釣り人に聞いてみる。「エンルムには何度も通い、いい思い出してきた。今年も55cmの本アブラコを抜き上げた。この溝だけでカジカ、アブラコと大釣りをして、優勝をしたこともある。今日はハゴトコ1匹。こんな事もある。一度大釣りすると、もう一度あるかもしれないとついつい来てしまうが、そんなにうまくはいかないものだ。しかし、なぜだかこのエンルムには引きつけられるものがある。今日は釣れなかったが見捨てないでこれからも通いたい。あんたは今日初めてかもしれないが、釣れない日ばかりではないのだよ。」と諭された。また、別の御仁は「様似港内の通称トイレ前の100m程前方に根がある。そこに遠投を掛けてアブラコを大釣りしたことがある。」また、更に別の御仁は「防波堤のつけ根でカジカの大釣りをして優勝したことがある」と過去の実績に自信をもった口調で話された。皆それぞれが某かの思い出をひっさげてここに通ってきているのだ。今回の貧果にもう二度とエンルムには来る事はないなと思っていたが、もう一度挑戦してみる価値はありそうだ。



様子港方面を望むと潮が混んできた。平盤をそろそろ引き上げねばならないか

8時には潮が満ちてきて、足下に置いたバツカンが流されるようになってきた。更に雨がシトシトと落ちてくるようにもなったので片付け始めた。9時半までは立ち込みをしながらでも釣りをすることが出来る状況にあるのだが今日はもういいだろう。こんなに早く上がるのはワスリでボンズを食らった時以来か？ 何にでも潮時というものがある。いまはその潮時なのだ。

これまた、のんびりと丁寧に片付けて、防波堤の根元に置いておいたキャストに荷物を付けて会所前のバス停に向かった。バス停には多くの釣り人がバス待ちをしており仲間同士の賑やかな会話が弾んでいた。その輪の中に私も加わり、お互いの健闘を分かち合った。

審査結果

優 勝	前野達志	1 7 0 4 点 (アブラコ474mm+カジカ 466mm+7640g)	琴 似
準 優 勝	鹿島釣狂	1 2 8 2 点 (アブラコ450mm+タカノハ350mm+4820g)	様 似
3 位	嵐 光博	1 2 2 9 点 (アブラコ443mm+カジカ 360mm+4260g)	近 浦
4 位	吉本孝則	1 1 5 4 点 (カジカ 432mm+アブラコ243mm+4790g)	上 近 浦
5 位	長岡 大	1 1 4 8 点 (アブラコ386mm+タカノハ386mm+3790g)	下 笛 舞
身長優勝	岡 英成	1 4 6 8 点 (カジカ 453mm+アブラコ384mm+6310g)	琴 似

審査が始まった。会長から今日はいつも身長を測っている吉井氏がいないので鹿島が測りなさいといわれた。自分の魚を測る番になり、タカノハを身長計に当ててみると1、2mmほど足りなくて、その場で魚をグイッと伸ばしてみる。すると簡単に35cmを超えたところを指したので「35cm！」と声高々と読み上げた。その結果私は準優勝に滑り込むことが出来たのだ。

総合優勝者は、得意の琴似に入った前野会長である。明け方に電話を頂いたときは、これから前方の岩に乗るところであり、暗い内からアブラコ、カジカとも揃えていたようで声がいつになく弾んでいた。審査の計量では3回に分けて量るという快挙で岩見沢釣遊会歴代高得点の記録を更新した。今年は春から不調を嘆いていた前野会長だったが、今回の大釣りでその溜飲を下げたことだろう。第3位は嵐氏である。得意とする上近浦で大物アブラコ、カジカを難なく揃え、年間優勝争いしている吉井氏を1歩リードしたように思える。身長優勝者は岡氏である。前野氏、西川氏と共にに入った琴似で大物カジカを揃えてきた。岡氏は1週間前に西川氏と共に下見に入って、井寒台でカジカを大釣りしたが、琴似は大会の本命場所として竿を出すのを控えていたのである。団体戦はAチーム、Dチームの平均点数がそれぞれ1261点、1256点という高得点での接戦で、今回の大会での激釣ぶりを推しはかることが出来るというものだ。長岡氏が38.3cmのタカノハを出した。私も7月に2度ほど釣り上げたことがあるが水っぽく感じてそれほど美味しいとは思わなかった。しかし、今回のタカノハを早速刺身にして食してみると、脂がのって正に王鰈に相応しい美味さであった。おそらく旬の時期が今時分なのだろう。

今年度の大会も残すところあと1回となった。年間順位や大物賞争いが熾烈を極めてい
るが、11月としては比較的温暖で穏やかな内浦湾での大釣りを夢見ながら帰途についた。



前列 左から準優勝の筆者、優勝の前野達志、3位の嵐 光博、後列身長優勝の岡 英成
(敬称略)



妻「今日は石狩鍋、シャケは先日お父さんが釣ってきたものです。この刺身は脂がのってしかも上品な味わいで美味しい魚ですね。何という魚ですか？」

私「それは幻と言われてきたタカノハという魚だ。タンタカとかマツカワなどとも言われ最近では『王鰈』と銘打って高級魚として鮮魚店に並べられるようになった」